2015年度入学試験問題

国　語

（試験時間　13：35～15：05　90分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

限界集落のような、効率性の悪い地域には、この際、消滅してもらった方がよいのではないか――過疎問題に取り組んでいると、こうした意見をよく聞くことがある。テレビの報道などで識者やコメンテーターも発言しているくらいだから、世論とまではいかないまでも、広く世間にくすぶっている潜在的意見と言ってよいのだろう。

（中略）

実のところ、この問いは、突き詰めていくと論理的に自己矛盾をきたし、問いを発した人自身を破壊しかねない、①根源のところで間違っていると言うべきものである。

しかし、まずはここで問題となっている「効率性」の議論に乗って、効率性の観点で反問することから始めてみよう。

まずこの問いが正しいとして、では何をもってその「効率性」を判断するべきだろうか。

歴史を大きく遡ってみよう。超高齢地域のうち、多数を占める山村は、本来はきわめて効率性の高い地域だった。山村の多くが、採集狩猟と農耕をベースとして自給自足を実現しうるような場所が選ばれ、切り拓かれている。いま問題になっている過疎集落のほとんどは、長い歴史の中ではむしろ、生きていくのに効率的で合理的な場所なのである。

むろん、それぞれの集落は市場経済にも強く結びついており、決して長い歴史を自給だけで過ごしてきたのではない。しかし経済の規模が現在のように巨大化していない段階では、自給自足の確保もまた必要であり、それが可能であったからこそ、その地での生活が可能となっていたのである。そして、市場経済と言っても、それが国内に限られていた限りでは、それぞれの地域はそれぞれの役割を持ちつつ、互いに深く関わりながら国民社会を形成し、いわば明確な分業が成り立っていた。それゆえ、広域的なつながりの中で見た場合にも、各集落は互いに合理的・効率的に結びつきあっており、無駄な地域などはなかったのである。

一部の地域が効率が悪いとされるようになってくるのは、食糧や燃料、原料生産の業種が国際的な市場経済の波に押されるよ

うになってからであり、たかだか数十年のことにすぎない。グローバル経済が今後も安定的に我々に恩恵をもたらしてくれると仮定できるなら、いわゆる過疎地域の大半は、今後も効率性の悪い地域であり、その生産現場を維持することは無駄なことになる。他方で、グローバル経済については、今後とも先行き不透明な面があり、海外では盛んにその抵抗運動も行われている。植民地主義の温存や貧困、差別問題と結びついたり、あるいは環境問題・エコロジー問題との関連も指摘されており、グローバル経済が必ずしも人間に幸せをもたらすものとは考えられていない。また、ふくれあがった巨大経済は破綻したときの崩壊の規模も大きく、グローバル経済に頼った国際社会の設計はリスクが高いという議論も根強い。ほんの数十年の変化をもって歴史的判断を急ぐことに、我々は慎重でなければならない。すでに約一〇〇年ほどの間に、世界大恐慌と世界大戦を経験し、農山漁村がその一時的な避難場所になったばかりなのである。

それでも、グローバル化は世界的趨勢であり、その中で日本という国の形もそれに適合するよう効率的にスリム化する必要がある、というふうに議論することもできる。しかしそのように議論できたとしても、我々はさらにより本質的な問題に直面することになる。

第二の問題は、効率性の悪い地域には消えてもらうとして、ではその判断はどのように行えるのかという点である。抽象的論理的にはともかく、判断を具体的にどのように下すことができるのか。この問題はさらに二つの問いに分けて考えていくことができる。

まず一つには、どこまで残し、どこまで切り捨てるか、その判断はいったい何を基準に行いうるのかという問いである。何をもってある地域を効率的と考え、また別の地域を非効率と判断できるのだろうか。効率性をひとまず経済性とするなら、国際競争に勝てるような経済力を国民に貢献しうる地域が効率性の高い地域ということになる。もしそうなら、例えば青森県などは明らかに効率性の悪い地域として、原子力発電所と自衛隊の基地以外、そもそも不要ということになりかねない。まして原子力開発の見直しが進む中、今後はいっそう苦しい立場に立たされるだろう。では岩手県はどうだろうか。宮城は。福島は。突き詰めれば関東や中部の一部のみ以外は、日本の中からなくなってしまった方がよいという議論にもなりうる。国際競争の中で

はお荷物にすぎないからだ。しかし、ではどこでその線引きを行えるというのだろうか。

このように、一見、絶対的真理のように見える効率性の論理も、どこかで危ういものを持っていることに気づく必要がある。思考実験を色々と繰り返してみるとよい。効率性／経済性を、現時点での経済性ということだけで考えていけば、高齢者は無駄だし、子供も不要となる。しかしそのような社会は長く存続できない。子供や高齢者のいない社会などないからである。とすると、この問いは、どこか根元のところで間違っているのである。それでもなお、この問いが発する効率性の問題提起が正しいものであるとしよう。では、誰が、ある地域を無駄だと判断し、その存続の廃止を決定しうるだろうか。その主体はいったい誰なのだろうか。これが二つ目の問いだ。

集落存続の問題は、医療倫理の問題などと非常に似かよった面があることに注意しよう。患者が不治の病にかかっている。いま作動している生命維持装置を外せば、患者の命はない。装置にはそれなりの経費がかかるから、経済性だけを考えるなら、この人の命を長らえることは無駄である。しかし、では誰がそれを判断するのだろうか。そもそも、その患者の生命は本当にあと数日だとする明確な根拠はあるのだろうか。もしかするともっと生きながらえるかもしれないし、その間に新たな治療法が解明されるかもしれない。

医療の現場で治療の継続を判断するのは、根本的には、医者ではなく、研究者でもなく、まして世論やマスコミでもない。やはりその当事者や家族である。むろん、生命維持装置にかかる経費の問題もそこでは重要な指標にはなろう。それでもその経費の多寡③をふまえた上で、最終的に決断する主体は、本人自身であり、その生きる意志にかかっている。

このアナロジー（比喩）は、限界集落論と効率性／経済性の議論の関係を理解するために、きわめて分かりやすい状況を示してくれる。地域社会を存続させていくために必要な財政やインフラをどのように確保していくべきか、このことには様々な人が参与し議論することはできる。しかしその地域の将来を決めるのは、［　④　］。個人に置き換えればすぐに分かる。「あなたが生きているのは世間にとって無駄なので、早いうちに亡くなってはいかがですか」。

「効率性の悪い地域は消えた方がよい」という議論は一見合理的に見えるが、いわば右のような発言と同じことを、ある特定

の地域に対して言っているのである。言われた方は確かにぐうの音も出ない。しかし、では何をもってこの人は自分よりも高いところにいて、自分に対してこのような発言ができるというのだろう。発言しているその人自身は、自分自身の存在を、世間に対して有意義なものであると胸を張って言い切ることができるのだろうか。自分と他者を比べて、自分の方が生きている価値があると言う人は愚かである。

だが、この医療のアナロジーは、実際の限界集落論と違う面もある。

死に至る不治の病は、過去の症例からの科学的推測であって、未来に対する予測にはそれなりの強い根拠があるかもしれない。しかし、限界集落論が示している事態は、まだ観察されたものではなく、表面的に見えるところから進めた、単なる［⑤］にすぎないからだ。

高齢者ばかりの集落も現れているが、当事者である多くの過疎地域の人々に、まだ自覚症状はない。漠然とした不安は堆積しているが、事態はまだ［⑥］してはいない。二〇年前の予測では、高齢化率が五〇%を超えると、地域は存続しえなくなるとされた。しかし現実にはそうはなっていない。事態は進展しないかもしれない。それどころか、もしかすると、我々が気づいていない、地域を存続させる隠れた構造が存在しているのかもしれないのである。

「効率性の悪い場所には、この際、消滅してもらった方がよいのではないか」――一見、客観的で中立的な立場から発しているかのように見えるこの問いも、よくよく検討してみると、具体的には、「グローバル経済下の戦いの中で、日本という国家の（現在の）経済性のために、負担になる地域はなくなってもらった方がよい」という言明に縮約されうる。

むろん、どのような意見を表明するのも自由だし、こうした問いを発することもあってもよいのかもしれない。しかし、こうした問いには例えば、「うちの地域は今後とも存続するつもりだし、そのように努力したい」という答えで十分である。さらには「この地域は頑張っているので、目先の経済性はともかくとして支援すべき」というのもありうるし、「私はこの地域が好きだから応援したい」というのも正しい。いずれも、ある特定の立場から特定の価値を表明したものとすれば同列にある。効率性から地域を問い直す立場は、数ある価値のうちの一つにすぎない。

こうしてこの問題は、基本的には、異なる価値の間の対立の問題として考えることができる。

（山下祐介『限界集落の真実』による）

〔問一〕 傍線①「根源のところで間違っている」と筆者が考える理由は何か。もっとも適切なものをA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

A 原子力発電所が敷設される青森県は、原子力開発の見直しという問題に迫られることになるから。
B グローバル化する経済が、必ずしも多数の人間に幸福をもたらすと捉えることはできないから。
C 絶対的真理のように見える効率性の論理も、過疎対策に有効な手段を示すことができないから。
D 効率性や合理性を追求していくと、高齢者や子供も不必要だと判断することになりかねないから。
E 限界集落問題を、地域の消滅予言として捉えるのは現地に生きる人々の意欲を奪う危険があるから。

〔問二〕 傍線②「趨勢」、③「多寡」の意味としてもっとも適切なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

②「趨勢」
A 物事がより進んだ段階に移っていくこと
B 社会や時代の全体的な傾向
C 一時的に流行すること
D 物事が最終的に落ち着くこと
E その時代の社会を支配する権力

③「多寡」
A 多いことと少ないこと
B 分量が適度であること
C 数量や規模が大きいこと
D 投入した費用に見合うこと
E 数量や程度がわずかなこと

〔問三〕 空欄④に入れるのにもっとも適切な文をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

A 個人ではなく、社会全体であるべきだ
B 素人ではなく、専門家であるべきだ
C 他人ではなく、本人自らであるべきだ
D 国家ではなく、地方自治体であるべきだ
E 当事者ではなく、第三者の判断であるべきだ

〔問四〕 空欄⑤⑥に入れるのにもっとも適切な語をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

⑤
A 傾向
B 杞憂
C 誤解
D 憶測
E 流言

⑥
A 集約化
B 鎮静化
C 適正化
D 顕在化
E 複雑化

〔問五〕 次のアーオのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 超高齢地域を無駄または無用だと評価しその存廃を決定することは、喫緊の政策課題である。

イ 医療のアナロジーから浮かび上がる問題は、限界集落の問題と大きく重なり合う部分がある。

ウ 今後のグローバル経済のさらなる発展を前提にして、農山漁村の問題を決定する必要がある。

エ 限界集落問題は、世論のいかんにかかわらず、効率性や経済性の価値から議論すべきである。

オ 国際的な市場経済が山村に押し寄せて以降、集落間相互の明確な分業体制が成立していった。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

不確定性原理が提唱された時代のドイツでは、ハイデガーの哲学や、フッサールの現象学も広まっていました。現象学は、あとで述べるように、現代の思想や社会学に大きな影響をおよぼします。

（中略）

近代の基本的な考え方は、「主体があって客体を認識する」というものです。これは物理学でも、経済学でも政治学でも同じです。

それをもとに、自然科学も社会科学も、このように考えてきました。この世のことは、物体Aと物体Bのそれぞれの運動を観測すれば、その相互作用として把握できる。経済というものは、A社が原料を買って、加工してB社に納入し、消費者のCやDに販売する。政治過程は、企業Aが政治家Bに働きかけ、政策Cになって議会を通過する。こういう考え方を前提に、近代的な社会科学は成りたっているわけです。

現象学は、それは成りたつのかを問いました。しかし、「この世のことはわからない」という不可知論かというと、そうではありません。実際にわれわれには、ものが見えています。それはどういうことか。ものを認識するというのはどういうことか。そういったことを考えます。

そこでフッサールとその後継者が提唱した考え方は、主体と客体、「私」と「あなた」はあらかじめ存在するのではなく、「志向性」のなかで事後的に構成されるのだ、ということでした。この考え方を、私なりに説明します。

けんかをすると、「あなたがそんな人だとは思わなかった」ということがしばしばおきます。近代科学の考え方では、私は「あなた」を誤って認識していた、今回新しい観測データが入ったので正確な認識に改めた、ということになります。

ところが、そういう考え方をすると、けんかはもっとひどくなります。「私だって君がそんな人間だとは思わなかった」とか「あなたの認識は間違っている」と、相手は言い返します。それに対し、「あなたの認識のほうこそ間違っている」と応じて、

おたがいに罵りあうようになります。

近代的な考え方では、どちらかが正しいか、あるいはどちらも間違っているとしても、どこかに正しい「真実」があって、それを人間は把握できるとされます。離婚訴訟などは、どちらの認識が正しいのかを立証しようとします。

かといって、記憶は変形しやすいし、それぞれが言っていることは、誤認やうそがあるかもしれません。そこで、殴られたときに医者にかかった診断書や、録音しておいた罵りあいなどの、証拠を提出して「真実」に迫ろうとします。くりかえしになりますが、これは「私」と「あなた」を正確に観測すれば、その相互作用として世界を把握することができる、という考え方を前提にしています。

そもそも、「私」も「あなた」も、日々変化しています。機嫌がいいときの「あなた」と、悪いときの「あなた」は違います。前者が誤解だった、後者がほんとうだった、正確な認識が達成された、という考え方に立てば、「そんな人とは思わなかった」ということになりますが、そういうものでしょうか。永遠不変の「あなた」の本質など、わかるのでしょうか。

むしろ、こう考えられないでしょうか。「あなた」の本質などというものは、人間には観測できない。ただ、そのときそのときに、この世に現れた（現象した）姿が見えるだけだ、と。

じつは「現象」と訳されている言葉は、古代ギリシャでは「イデア」と対置される、移ろいやすいこの世に現れた影のようなもの、という意味の言葉でした。それは無視して本質を把握すればいい、という考え方もあります。しかし現象学は、その移ろう現象とはどういうものであるのか、どう向かいあえばいいのか、を考えたわけです。そしてこの現象学が、「［　①　］主体」という考え方が崩れたあとの思想界に、影響を与えていくことになります。

それでは、「あなた」の本質は観測できないとして、「私」はわかるのでしょうか。

「私のことは私がいちばんよく知っている」とは言えません。相手から指摘されて初めてわかることもあります。しかし、けんかの相手から指摘されても、それは誤解だ、あるいは一面的だと感じます。では第三者ならわかるかといえば、それもあてになりません。

そもそも「私」というものも、日々変化しています。相手と仲良くしているときと、けんかをしているときでは、自分でも「自分はこんな人間だったのかな」と認識を新たにすることがあります。

それでは、こう考えたらどうでしょうか。最初から「私」や「あなた」があるのではなくて、まず関係がある。仲良くしているときは、「すばらしいあなた」と「すばらしい私」が、この世に現象します。仲が悪くなると、「悪逆非道なあなた」と「被害者の私」が、「私」から見たこの世に現象する。これを、「ほんとうは悪逆非道なあなたのことを、私は誤認していた」と考えるのではなく、そのときそのときの関係の両端に、「私」と「あなた」が現象しているのだ、と考える。

つまり、関係のなかで「私」も「あなた」も事後的に構成されてくる、と考えるわけです。関係の中で作られてくるわけですから、どちらが正しいということは言えません。向こうが怒ればこちらも腹が立ちます。向こうが笑えばこちらも警戒心を解きます。関係は変化しますから、「私」も「あなた」も変化します。おたがいが、作り作られているのです。

このことを、「私」と「あなた」はもともとあって、それが相互作用をしたのだと考えるなら、向こうが笑ったからそれを認識して反応したのだ、と考えます。しかしここでは、関係があって「私」も「あなた」も構成された、と考えます。

この考え方に立つと、けんかというのは、どちらが悪いということは言えません。関係が悪いのです。悪い関係の両端に、「私」にとっては「悪いあなた」が構成され、相手にとっては「悪い私」が構成されるわけです。

それでは納得がいかないということで、証拠を持ってくることはできます。しかし現象学的に言うと、証拠もその時点の関係の中で構成されたものです。昔の日記や写真を引っぱり出してみると、仲のよかったころから、「じつはこういうやつだった」と発見したりします。写真という対象と「私」の関係のなかで、認識が事後的に構成されてくるわけです。

裁判で物的証拠をもちだしても、当時の写真や録音との関係のなかで、「私」や「あなた」や「第三者」が、それぞれに「[②]」を構成するにすぎません。記憶となるともっと変化が激しく、関係がいいと美しい記憶が作られ、関係が悪いと悪い記憶が作られます。

ここではあらかじめ「私」や「あなた」がある、それが相互作用する、という考え方を個体論とよびましょう。それにたいし、

関係のなかで構成されてくる、相手も自分も作り作られてくる、という考え方を関係論とよびましょう。

人間は、なかなか個体論的な発想から抜け出せません。やっぱりあなたが悪い、私が正しいと思い、あれこれの観測を数えあげてしまう。そこのところで、「ちょっと待て、いったん頭を空にしてみよう」という知恵が必要です。それを「エポケー」といい、日本語では「判断停止」などと訳します。

このような考えをフッサールは、第一次大戦前から唱えていましたが、戦後に広く受け入れられていきました。戦争の経験、科学の変化、ドイツ社会の動揺などが重なって、「絶対ということはありえない」という感覚が広がっていたことが背景になっていたと思われます。

（中略）

こんな話は、ただの［　③　］でしょうか。人間関係に応用できるのはわかったけれど、経済学や政策には関係ない、と考える人もいるかもしれませんが、そうともいえません。

たとえば途上国の街に行くと、昼間から道端でぼーっと座りこんでいる人がよくいます。その側には、タバコが何箱かならべてある。売れている様子もないし、売る気もあるのかわからない。そもそも売っているのだろうか。

こういう人を、「自営業者」と分類するか、「失業者」と分類するかは、むずかしい問題です。見る人や定義によって変わる、としか言えません。調査すればわかるといっても、警官が「おまえ、なぜ働いていないんだ」と聞けば「商人です」と答えるでしょうし、税務署が「税金の申告をしなくていいんですか」と聞けば「失業者です」と答えるでしょう。調査者との関係によって、観測されるものが変わるとしかいいようがありません。

じっさいにある国の農村統計で、村長のきまぐれから、いきなり「農民」が減って「商業者」がふえたりすることもあったそうです。もちろんこの統計をもとに、経済学者が「第一次産業から第三次産業への転換がおこった」と論じるのは、ナンセンスです。

そんなのは途上国の話だ、ともいえません。日本でも警察が外国人登録証の携帯義務違反を厳しく検挙する方針をとれば、い

きなり外国人の犯罪件数が増えたりしました。逆にいうと、外国人の犯罪が増えている、という演出をすることもできました。

また一九五一年の日本で、こういう調査がありました。ある新聞社が、「日本も講和条約ができて独立国になったのだから軍隊を作らねばならぬという考え方に賛成ですか」と聞いたら、賛成が七〇パーセント以上。ところが別の新聞社が、「日本に国防軍を再建するのに賛成ですか」と聞いたら賛成は四〇パーセント台でした。

こういうことを避けるために、調査をする場合には、調査対象に影響を与えないように配慮する、ということになっています。たとえばアンケートならできるだけ中立的な聞き方にする。社会調査の場合には「調査者は透明人間になるべきだ」とされます。

そういう配慮をした結果、世論調査などでは、「××内閣を支持しますか」に○か×、その理由は「政策に期待が持てないから」「人柄が信用できないから」とかから選ぶ、という質問をします。しかしそういう聞き方で、人びとがほんとうに考えていることがわかるでしょうか。それを統計的に処理して、どこまで「民意」がわかるでしょうか。

しかも、そういう「中立的」な聞き方をしても、「そう聞かれるとそんな気がするな」という調査対象への影響を完全に排除することはできません。世論調査の結果が発表されたら、確実に次回の調査に影響をあたえます。ていねいに社会調査しても、調査者が文章に書きとめたら調査者の解釈が入りますし、録音機やカメラで記録したらそれを意識するので、その場の雰囲気が変わります。

学問だけでなく政策もそうです。たとえば、政策金利を下げれば、預金するより投資したほうがいいという判断を下す人が増える、だから景気が刺激されるという考え方があります。しかしこの世の人間は、ニュートン力学が描く物体の相互作用のようには動きません。政策金利を下げたということは、こういうことを政府は考えているな、だったら投資は控えよう、と行動したりします。

いまでは政府や中央銀行の側も、そういう市場関係者の反応を知っていて、政策金利で景気を操作することは半ばあきらめ、企業や投資家へのメッセージだと考えるようになっていたりします。つまり中央銀行と投資家が、おたがいに［④］くる関係になっているわけです。

（小熊英二『社会を変えるには』による）

注　不確定性原理……第一次世界大戦後に提唱された量子力学の原理。　ハイデガー……ドイツの哲学者。
フッサール……ドイツの哲学者。　ニュートン力学……近代科学の成立に影響を与えた力学。

〔問一〕　次の文章を一つの段落として本文中に入れるとすればどこが適当か。もっとも適当な箇所を、その前の文の終わりの十字で答えなさい。（句読点や括弧も一字に数える）

しかし、「私」と「あなた」を正確に観測することなど、できるのでしょうか。当事者どうしで不可能なら、第三者に意見を言ってもらうこともできますが、それだって観測者は人間です。

〔問二〕　空欄①②③に入れるのにもっとも適切な語句をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

①
A　現象を構築する
B　権利を追求する
C　真理を拒絶する
D　理性を行使する
E　客体を否定する

②
A　事実
B　主体
C　集団
D　記憶
E　現在

③
A　抽象論
B　理想論
C　一般論
D　精神論
E　運命論

〔問三〕　空欄④に入れるのにもっとも適切な六字の表現を、本文中から抜き出して答えなさい。

〔問四〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 近代科学の考え方は、主体が客体を観測することで、その本質を認識することができるという前提に立って形成されてきた。

イ 「絶対ということはありえない」とする関係論に基づくと、判断力が停止し世界を把握できない人が増えるので、社会不安が拡大する。

ウ 統計調査や社会調査は、調査者が対象に与える影響を完全に排除することができないので、近代科学の分野だとみなすことはできない。

エ 人間は日々変化するので、さまざまな時点で表出する「私」の姿のうち、どれが自分の本質であるかを明らかにすることはできない。

オ ドイツでは、第一次世界大戦中の悲惨な体験や敗戦による混乱を通して、近代科学の妥当性に疑問を持つ人が増加した。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

「どの大陸も、それ自身の場の精神をもっているものだ」と、D・H・ロレンスは、アメリカ文学を論じたその小著（『アメリカ古典文学研究』）の第一章を「場の精神」と名づけている。「場の意識」とよんだ方がより的確かもしれない。たしかに、アメリカは、常に自己をヨーロッパと対比させることによって、自己の存在理由を主張しつづけてきた。アメリカのデモクラシーは、ヨーロッパの古い政治制度・社会制度、広くヨーロッパ文化に対する否定と絶縁という元来ネガティヴな反応と表裏して存在していたといってよい。その点「アメリカにおけるデモクラシーなるものは、実はヨーロッパの古き支配、ヨーロッパの精神をくつがえすための手段にすぎないのだ。かりそめにも、ヨーロッパが破滅することでもあれば、アメリカのデモクラシーなど消えてなくなってしまうであろう」とロレンスが語るとき、それはいささか誇張された表現であるとはいえ、そこにはやはり一面の真理が含まれているといえよう。

アメリカのデモクラシーを問題にするとき、われわれはまた、ヨーロッパとの対比におけるアメリカ人の自己像、あるいはヨーロッパ人のアメリカ像を出発点としなければならない。アメリカ人の自意識とは、つまりヨーロッパ人に対するコンプレックスにほかならないともいえるからである。アメリカ文化は、元来ヨーロッパから渡ったものであり、ヨーロッパ文化から継承されたものといえる。しかし、他方それだけに、アメリカ人はヨーロッパ文化を意識的に自己の［　①　］としてとらえ、それとの断絶の上に新しいみずからの文化を築こうとする。

このヨーロッパ文化の継承と断絶という矛盾が、大西洋という空間によって象徴される。一方において、大西洋はアメリカをヨーロッパと結びつける連帯の象徴であり、アメリカを西欧文化の一環として意識させるものであるが、他方において、大西洋はアメリカをヨーロッパから断ちきる孤立の象徴であり、特殊アメリカ的な文化を意識させるものでもある。否、歴史的にいえば、少なくとも意識の問題としては、アメリカ人にとって、大西洋はアメリカを、地理的にと共に文化的にも、ヨーロッパから区別するところの空間であった。歴史家ダニエル・ブアスティンのいうごとく、「アメリカでは、二十世紀のはじめ頃までは

〈アメリカン〉と〈ユーロピアン〉という言葉は、正確な地理的用語というよりは、論理的な対比として用いられてきた（『アメリカとヨーロッパ像』）のである。このようにヨーロッパとアメリカという対比が、地理的と論理的との重複された対比としてとらえられる結果、元来普遍的理念であるデモクラシーが、特殊アメリカ的理念としてとらえられやすい。

[②]、このデモクラシーという普遍的理念とアメリカという特定の場とを結びつけて意識し、定形化したのはジェファソンであった、といってもあやまりではないであろう。もちろんジェファソンは決して[③]ヘンキョウな愛国者ではない。またヨーロッパ文化についても深い教養をもっていた。ジェファソンの蔵書は当時アメリカ一のものであった。一七八四年の夏から八九年の秋にかけて、五年あまり主として駐仏公使としてパリに生活し、広くヨーロッパ各地を旅行している。内気でいささか意識[④]カジョウなジェファソンは、前任者フランクリンのように社交上手とはいえなかったにせよ、ヨーロッパ第一級の知識人と交わり、フランス生活を楽しんでいた。イギリスの学者マックス・ベロフが『トマス・ジェファソンとアメリカン・デモクラシー』の中で「フランスに対する彼の愛情は終生変わらなかった」と記しているが、そのまま受けとってよいであろう。

しかし、このヨーロッパについての書物と実物とを通しての知識にもかかわらず、いやまさしくそれ故に、ジェファソンのヨーロッパ観はきびしい。彼のヨーロッパからの手紙は、ヨーロッパの圧制・腐敗についての記述にみちている。ジェファソンの眼にうつったヨーロッパとは、「人間の尊厳が[⑤]シイ的な差別の中に失われているヨーロッパ、人類が堕落のいくつかの段階に区分されているヨーロッパ、多数が少数の圧迫にたえかねているヨーロッパ」にほかならなかった。比較的高く評価していたイギリスについても、一八一四年のことであるが次のごとく記している。「イギリスでは、幸福はただ貴族だけの運命です……貴族を人口一〇〇人中四人と推定しますと、イギリスの幸福は悲惨に対して一対二五の割合でしか存在しないことになります。合衆国では、その割合は、八〇〇万対零、あるいは全部対零ということになります」。

このいささか素朴・単純な量的測定はしばらくおくも、ジェファソンの眼には市民革命直前のヨーロッパ大陸、貴族制の伝統の未だ強いイギリスは、圧制と腐敗とにみちた場としてうつったのである。それに対して、アメリカとは自由にして健康な場にほかならなかった。彼は、後輩のモンローに次のごとく書き送っている。「あなたが当地〈ヨーロッパ〉にお出でになる便宜が

ありますように心から祈っています。……旅行によって、あなたは祖国を、祖国の土壌・気候を、その平等・法律・人民・習慣を熱烈に愛慕するようになるにちがいありません」。これは、単なる異境の地にあるもののえてして陥りやすいホームシックに基づく祖国讃歌ではない。ジェファソンの眼には、君主政・貴族政と共和政（この頃、彼は共和政をほとんど民主政と同じ意味に使用している）という体制的対比は、ヨーロッパとアメリカとの対比という形で現実化されていたのである。君主政・貴族政対民主政という体制的対比、圧制・腐敗対自由・健全という倫理的対比は、ヨーロッパ対アメリカという空間的対比と結びつけられていたといってもよい。

さらに、つけ加えておくならば、この空間の論理は、単にヨーロッパとアメリカとの対比によって使用されるだけではなく、いわばその［⑥］として、アメリカ内部においてもしばしば使用される。すなわち、東部対西部という対比である。東部対西部という対比は、単に地理的対比を示すのみならず、しばしば固定的社会対流動的社会という対比と重なりあって使用される。［⑦］、西部はよりアメリカ的な社会としてとらえられる。エマソンが「アリゲニー山脈まではヨーロッパの延長である。そこを越えて初めて本当のアメリカが始まる」と語ったとき、それは独立後半世紀を経、文化的にもヨーロッパ、ことにイギリス文化からの独立の必要が痛切に意識されていた頃であった。ヨーロッパにないもの、それは西部の荒野に求められなければならない。

それからさらに半世紀余をへて、東部対西部という地理的対比と体制との関連は、ターナーによっていわゆるフロンティア学説として、より理論化される。「開拓者と海岸との間に山脈が聳えたときから、アメリカニズムという新しい様式が現われた」。そして「フロンティアの前進は、ヨーロッパの影響から離脱する着実な運動、アメリカ的進路に沿った着実な独り立ちへの発展、を意味した」とターナーはいう。そして、彼がアメリカ的進路・アメリカ化（脱ヨーロッパ化）というとき、それはデモクラシーの増進ということと同義異語として考えられていたといってよい。

体制の相違が、空間の相違と重複してとらえられるとき、体制の変改は空間の移動の形で理解される。元来デモクラシーは、ヨーロッパでは一つの［⑧］概念である。つまり、過去の体制と時間的に断絶することによって、デモクラシーは形成され

る。封建社会対近代社会、君主政対共和政といった体制の相違は、同一空間内における相克＝変改（つまり革命）を通じて生まれてくる。したがって、体制は、同一空間内において、時間的緊張の下におかれる。

しかし、アメリカの場合、体制は空間と重なりあって理解されているが故に、体制の変改とは、同一空間内における時間的断絶として起こるのではなく、各人が空間をかえることによって起こるものとされる。つまりそこでは、体制の変改（＝革命）とは、まず移住による革命であり、場の移動による革命なのである。

このことを最も鮮明に意識し、語ったのはフランスよりの移住者クレヴクールであろう。クレヴクールの名は、わが国ではあまり知られていないかもしれない。⑨、アメリカ独立革命の頃書かれたその『あるアメリカの農夫からの手紙』と題するエッセイは、場の精神、そして場の移動の意味についてきわめて雄弁に物語っており、ヨーロッパ人によるアメリカ論、アメリカ文化論の嚆矢（こうし）ともいえよう。D・H・ロレンスも「フランクリンは、アメリカ人のまがうことなき実際的な原型である。クレヴクールは情緒的な原型である」と記している。ここでいう情緒的とは、アメリカの夢の追求といった意味にも、理想主義的といった意味にも、さらにはイデオロギー的な意味にも解してさしつかえないであろう。

クレヴクールも、場のちがい、ここアメリカとかしこなるヨーロッパとの差を強調する。「ここは、ヨーロッパにおけるような、すべてを所有する大貴族と何ものも所有しない人民の群とからなっているのではない。ここには、貴族も宮廷も国王も僧正も、いかなる教会の支配もない。……何千人も使用しているような大製造業者もいないし、⑩センレンされた奢侈（しゃし）品もない。富める者と貧しい者とは、ヨーロッパにおけるように、お互いにへだたりあってはいない。……われわれは、ために労し、飢え、血を流すような君主などもっていない。われわれは、世界に現存する最も完全な社会なのである」。このクレヴクールの対比は、あまりにも誇張された対比であり、自己満足に陥った自己像かもしれない。しかし、ここで重要なのは、そのイメージの強さなのである。

フランクリンの場合にも、アメリカがヨーロッパと比べていかに恵まれているかが強調されてはいるが、それはあくまで成功への条件であって、その条件を現実化するために各人の努力こそ重要視されている。ところがクレヴクールの場合には、⑪移住そ

のものに重点がおかれている感すらある。すでに、ここに「完全な社会」がある以上、ここに場を移動すること、それがすべてを変える。クレヴクールはいう。「動機はいろいろであろうが、彼らはここにやってきた。すべてが、彼らを活きかえらせるようになっている。新しい法律・新しい生活様式・新しい社会制度。ここで、彼らは人間となるのだ。ヨーロッパでは、肥沃な土壌もなく慈雨もなく、彼らは役にもたたない植物のごとき存在であった。……しかし、今や移植の力によって、彼らは根を降ろし、繁茂するのだ」。しかり、クレヴクールによれば、移植の力によって、つまり場の移動によって、変改は起こる。貧民は市民となる、という。

事実、何千、何万という貧民が、市民になることを求めて、アメリカにわたってきた。社会的移動への追求、地位上昇の要求は、地理的移動、大西洋横断によってみたされようとする。成功への夢は、まずアメリカへ行くことの夢と等置される。過去との時間的断絶は、ヨーロッパとの空間的断絶をバイカイとして達成されようとする。デモクラシーがアメリカという特定の場と結びつけて考えられている限り、各人にとってデモクラシーは、アメリカへの移住という形を通してのみ、自己のものとされることになる。

ちなみに、一見奇妙にきこえるかもしれないが、クレヴクールは、アメリカ革命にさいして革命反対の立場をとった。彼の論理をたどれば、次のごとく推定することもできる。革命はアメリカへの空間的移住によって達成された、また達成されるのであって、アメリカ空間内で行なわれるものではない。アメリカ内での革命は、コミュニティを破壊し、「現存する最も完全な社会」をゆるがすことになりかねない。もとより、クレヴクールの革命反対は、そうした論理だけに基づくものではなかろう。いずれにせよ、あれだけアメリカを讃美するクレヴクールが、アメリカ革命の進行と共にヨーロッパに帰り、その後一時ニューヨーク領事としてアメリカに渡るが、一八一三年、アメリカではなく、フランスにおいて永眠することになったのは興味深い。

（斎藤眞『アメリカとは何か』による）

注　D・H・ロレンス……二十世紀に活躍したイギリスの詩人・小説家。　ジェファソン……アメリカ独立宣言の起草者で、第三代大統領。　エマソン……一九世紀に活躍したアメリカの思想・哲学家。　アリゲニー山脈……アメリカ東部とそれ以西を分けるアパラチア山脈の一部。　ターナー……二十世紀初期に活躍したアメリカの歴史家。

〔問一〕　傍線③④⑤⑩⑫のカタカナを漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

③　ヘンキョウ　　④　カジョウ　　⑤　シイ　　⑩　センレン　　⑫　バイカイ

〔問二〕　空欄①⑥⑧に入れるのにもっとも適切な語をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

①
A　目標物
B　抑制物
C　投影物
D　対抗物
E　継承物

⑥
A　原型
B　延長
C　並行
D　象徴
E　裏面

⑧
A　空間的
B　普遍的
C　時間的
D　体制的
E　近代的

〔問三〕　空欄②⑦⑨に入れるのにもっとも適切な語をそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度以上用いないこと。

A　したがって　　B　なぜなら　　C　おそらく　　D　しかし

〔問四〕傍線⑪の「移住そのものに重点が置かれている」の意味することとして、もっとも適切なものをA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

A　圧制・腐敗のない社会であるために、アメリカはヨーロッパからの移民を魅了する。

B　ヨーロッパに留まる人々に比べれば、アメリカへの移住者は恵まれている。

C　アメリカに移住すると、そこには貴族や君主のいない社会が存在している。

D　アメリカには成功の条件が備わっているが、各人の努力こそが重要である。

E　ヨーロッパからアメリカに移り住むだけで、移住者は大きく変革されうる。

〔問五〕次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　大西洋によるヨーロッパからの断絶のため、アメリカはヨーロッパを意識せずに独自の文化を確立できた。

イ　アメリカ人がデモクラシーをアメリカ特有の理念だとみなすことは、「場」の論理で説明できる。

ウ　西部開拓によって「アメリカ化」が実現したという発想は、それがもたらした経済的発展に起因する。

エ　ジェファソンの離しいヨーロッパ観の根底には、ヨーロッパ文化や知識人に対する彼の低い評価があった。

オ　クレヴクールがアメリカ革命に反対したことは、彼自身のアメリカ社会に関する主張と一貫性がある。

四　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（25点）

技術における、パティキュラー、特殊な性質をより明確にするためには、民族誌的、歴史的資料に依拠しなければならない。そのために私は「技術文化」という概念を提出したい。「技術文化」とは、ある種の技術的原理の複合を、世界像や生きものに対する態度、生産性、労働に対する考え方などの価値指向と組み合わせた概念である。現在まで多くの研究において、技術は世界像や価値指向を含む精神世界とは区別された、物質に関わる領域の一部として取り扱われて来た。だが現実には、ある文化のなかでこの二つの側面は密接に関連しあっている。ある文化の技術に関わる側面は、その文化がもつ世界像の具象化であり、それは物質世界や生きものや労働についての価値指向と、その社会における人間関係を通して実現されるからである。

この方向での私の考察の出発点として、私はこのように定義された「技術文化」の仮説的操作モデルとして、日本、フランス、西アフリカで現在のブルキナファソに含まれる旧モシ王国の三文化から取った民族誌資料に基づいて、A、B、C三つの操作モデルを精錬しようと試みた。私が集約的に現地研究する機会を得た、アジア、ヨーロッパ、アフリカのこれら三文化は、相互に著しく異なっており、十九世紀後半まで、相互に直接の接触をもたなかった。

（中略）

西欧文化一般とも多くの共通性をもつ、フランス文化に基づく操作モデル（モデルA）は、第一にその二重の人間非依存指向によって特徴づけられるが、これは日本文化に基づくモデルBに見出される二重の人間依存指向と明確な対照をなしている。モデルAの二重の人間非依存指向は、第一に、使い手個人のコウセツ①によらずに、常によい結果を得られるように道具を工夫することであり、第二に、非・人間エネルギーを最大限に利用して、人間の労力を省き、同時により効率の大きい結果を得られるようにすることである。

これと対照をなして、モデルBの二重の人間依存性は、第一に、単純で特殊化していない道具を高度に訓練された人間のたくみさで多様に、有効に使いこなすこと、第二に、良い結果を得るために、惜しみなく人力を投入すること、によって特徴づけら

れる。

モデルAに認められる指向は、ヨーロッパ文明がその一つの派生形である西アジアの最古の農耕牧畜文化に由来するものであり、最大限の家畜の利用、乳や肉や皮や毛だけでなく、畜力も利用する考え方に基づいている。この指向性の起源は、『旧約聖書』の「創世記」によって正当化されている。「創世記」第一章～第二章によれば、創造神は己の姿に似せて人間を造り、他の動物たちを人間に役立つように造った。このようにして、人間は他の生きものたちの主人になるべく、創造神によって選ばれたのだ。この人間中心主義の確信は、さきに述べた技術についての考え方とともに、創造神が人間に示した、偉大な書物とみなされる自然を解読する、人類の努力の一部としての科学的探求に支えられてきたといえる。このようにしてモデルAは、非西洋世界も含む近代世界の指導原理となった、人権の考えをはじめとする近代ヒューマニズムに、思想的基礎を提供したといえる。

畜力や、水力、風力から、化石燃料のエネルギー、核エネルギーへと移った人間以外のエネルギーの利用は、エネルギー伝達装置の工夫を②ウナガした。車輪などの回転原理の広汎な使用、歯車、連結ベルトや連結桿などは、車輪が、モデルBの技術文化で極めて限られた範囲で用いられていた以外、モデルBにも、道具が人体の延長にとどまったモデルCの技術文化にも、外来の装置として取り入れられたものを除けば、存在しなかった。回転原理のみならず、梃子の原理を応用した道具もなかったモデルCの場合、人体の［　③　］という表現も可能であろう。骨盤が前傾しているため深前屈が楽な上半身と長い腕が、長い柄の鋤きをする短い柄の鍬、鍛冶師の柄のない鉄槌、モシ社会ではないが、同じブルキナファソのロビ、近接するマリのバンバラなどの社会で、轆轤を回転させるのではなく、人間が立って深く前屈したまま、土器のまわりを回って成形するやり方などに、人体の［　③　］の例を見ることができる。

フランス語で道具を意味する"outil"は"instrumentum"というラテン語に由来しており、"uti"「役立てて」、"usus"「使い尽くす」という感覚を帯びている。これは日本語の「道具」が元来は仏教用語で、「道」を学ぶための手立てであるという、道具を尊ぶ考え方とは対照をなしている。人間の行動の基本的指向として、「目的指向」と「過程尊重」という逆向きの価値観を対置させたとすれば、モデルAのフランスをはじめとして、いわゆる近代合理主義にいたる価値観を支えてきた指向は、「目的指向」で

あり、社会の相互合意性の高いモデルBやC、とくに社会と文化の同質性が高い日本では、「過程尊重」の価値観がつよかったといえる。「目的指向」はある目的を設定し、それを達成する最も効果的な手段を工夫する指向であるが、「過程尊重」は結果よりもそこにいたる手続きや態度の、［④］のみならず［⑤］な価値にこだわるものである。目的指向が最も強く要求されるはずの戦闘行為においてさえ、日本では敵味方が共通の［⑥］や［⑦］をもちえた状況から生まれた、過程尊重の事例を数多く見出すことができる。

技術文化における日本人の道具尊重の観念は、職人が道具をまたいだり足で押したりしない、剣道で竹刀をまたがないなどの仕来りにもあらわれている。農民が歳末に「道具のお年取り」といって、農具を洗い磨きあげて飾り、餅を供えてねぎらうとか、針供養のように、折れた針を豆腐や蒟蒻に刺して慰めるなどの行事にも認められる、道具の［⑧］と感情移入、ひいては道具の呪物崇拝とも呼べるような態度も、過程尊重のあらわれとみることができよう。この点では、人体の［③］の指向がつよく、「道具」に対する意識そのものが重要でないモデルCは、むしろモデルAに近い。

このようにしてモデルAでは、人間の労力やたくみさは、非人間エネルギーの伝達を操作することに主に使われてきたといえる。そのよい例は、自動車の運転に見ることができる。同じ原則は、犂や荷車を動物にひかせるという家畜の利用のうちにすでに認められる。人力を用いる苦しい活動を、このような仕掛けを用いて軽減することは、モデルAの基礎をなしている労働に対する態度とよく整合している。そこでは労働は、⑨根源において必要悪とみなされるからである。

このことは、フランス語で労働を表わすトラヴァーユ（travail）という言葉に象徴的に表れている。この言葉は、古代ローマで拷問に用いられた、訊問される人間を縛りつける三本柱トリパリウム（*tripalium*）という語に由来している。近代資本主義経済においても、経営者・労働者の双方にとって、労働は最小にすることが望ましい要因とみなされる。トラヴァーユという語は、女性の陣痛、分娩も意味し、産室は、サル・ド・トラヴァーユ（salle de travail）と呼ばれる。これは、『旧約聖書』『創世記』第三章で、禁断の樹の実を食べた女に、創造神ヤハウェが出産の苦痛を与え、男には食を得るために土地を耕す労苦（フランス語訳では「トラヴァーユ」）を課したという、人間の元祖がエデンの園から追放された物語に由来するのであろう。いず

れにせよ、苦痛をともなう出産も、骨折って土を耕すこと（フランス語のラブール（labour）、英語で労働を意味するレイバー）も、神から人間に課せられた罰というとらえ方がもとになっている。

日本では、家に仕事に来た職人に「ご苦労さま」とねぎらいのことばをかけるが、フランス語にはこれに対応する常用句がない。フランス人にたずねると、賃金をもらって仕事をしているのだから、そのうえに感謝の意をあらわす必要はないという、「契約」観念がもとになった労働観の答えが返ってくる。労働をめぐる契約観念がさらに希薄なモデルCでは、労をねぎらい、たたえる常用句は、モデルBの日本よりさらに豊かだ。

モデルCと同様、契約観念が不在ないし希薄なモデルBの日本語で、モデルAの「トラヴァーユ」に対応する「はたらき」、動詞形の「はたらく」は、元来、報酬を求めない献身的行為を意味しているが、これは主人と従属者、年長者と若年者、師匠と弟子など、恩恵と義務、尊敬とヒケ[20]などの不平等な二者関係のなかでの、経済外的強制が重要だったことと関連しているだろう。日本語では、これら不平等な二者間では、呼びかけの名詞や代名詞も非対称だ。上の者は下の者には「おまえ」「あなた」「きみ」などの人称代名詞で呼びかけることができるが、下の者から上の者に向かって「あなた」とは言えず、相手の名に敬称をつけたり、三人称風に相手の地位名で呼びかけたりする。日本語では呼びかけの親族名称と人称代名詞も非対称だ。子は父に「おとうさん」と呼びかけることはできるが、「あなた」という人称代名詞は用いない。フランス語やモシ語では可能な、父親から「わたしのむすこよ」という親族名称を用いた呼びかけは、日本語では考えられない。

世界観を、モデルCのモシ社会について見ると、不可視の至高の力ウェンデ（wende）が人間の運命を造る。だが人間はウェンデにはたらきかけ、とりいって（belem）、困難から逃れられるように取計らってもらう（manege）べく、祖先の霊や荒れ野の精霊を仲介者として、生贄（いけにえ）などの供えものをする。この意味で、モシ人は宿命論者ではない。彼らは世界が至高の力に支配されていると思っているが、人間は仲介者を通じて働きかけ、その至高の力に取りはからいを求める。だから人間の運命は、人間の力で変えられるのだ。この働きかけを表す動詞ベレム（belem）という語は、モシ社会の日常生活で頻繁に用いられ、実践される。不可視の至高の力ウェンデに対してだけでなく、対人関係においても、最高首長である王や、その下のさまざまな位階の

首長に対して、あるいはすべての権力者や社会的影響力のある者に対しても。何か贈り物をしたり、⑪ジキに応じた労役を提供したり、挨拶に行ったりして、必要な時にしかるべく取計らってもらうこと「マネゲ」(manege)を、多くの場合仲介者を通じて、頼むのである。ベレム(Belem)とマネゲ(manege)という、日常頻繁に用いられる二つの動詞によって表される観念は、モシ社会の価値指向を理解する鍵となるものである。

だが、このように不可視の力や、社会的有力者との関係を⑫ヘイソから良好に保つことによって、念願や事業を達成するという、契約観念とは逆の指向は、表われ方の違いはあるにせよ、モデルBの日本社会にも、かつては強く、現在でもかなりの程度見られる。八百万(やおよろず)の神や仏への願いごと、事柄を特定せずに「よろしくお願いします」という初対面の挨拶、特定の便宜供与などへの謝礼ではない毎年の盆暮の贈りものなどの風習に、それはあらわれている。

したがって、モデルCの技術文化に見出される価値指向性は、「与えられた状況を最大限に活用すること」と要約できるだろう。この価値指向性に基づいて、技術的側面においては、モシ人は「ブリコラージュ」を精錬して来たといえる。つまり特定のシステムにおける「純正部品」に頼るのではなく、見かけの、あるいは機能上の類似によって、当面手に入るありあわせの素材で、同じ結果を得るように工夫するのである。

(川田順造『文化を交叉させる』による)

注　ブルキナファソ……西アフリカに位置する共和国。　連結桿……動力を伝える装置。　マリ……西アフリカに位置する共和国。　呪物崇拝……超自然的な力をもつとされるものを神聖視すること。

〔問一〕　傍線①②⑩⑪⑫のカタカナを漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

① コウセツ　② ウナガ　⑩ ヒゲ　⑪ ジキ　⑫ ヘイソ

〔問二〕 空欄③⑧に入れるのにもっとも適切な語をそれぞれA～Eの中から選び、符合で答えなさい。

③
A 合理化
B 正当化
C 文明化
D 家畜化
E 道具化

⑧
A 儀式化
B 相対化
C 社会化
D 擬人化
E 画一化

〔問三〕 空欄④⑤⑥⑦に入れるのにもっとも適切な語句の組み合わせをA～Eの中から選び、符合で答えなさい。

A ④倫理的 ― ⑤実践的 ― ⑥人間観 ― ⑦自意識
B ④倫理的 ― ⑤審美的 ― ⑥倫理観 ― ⑦美意識
C ④論理的 ― ⑤技術的 ― ⑥価値観 ― ⑦目的意識
D ④道徳的 ― ⑤審美的 ― ⑥道徳観 ― ⑦目的意識
E ④論理的 ― ⑤技術的 ― ⑥世界観 ― ⑦帰属意識

〔問四〕 傍線⑨の「根源において必要悪」について、同じ意味になるもっとも適切な表現を本文中より十字から二十字以内で抜き出し、抜き出した最初の五文字で答えなさい。（句読点や括弧も一字に数える）

〔問五〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符合で答えなさい。

ア　モデルAの技術文化に見出される価値指向性は、自然界に存在するエネルギーを活用し、かつ科学的探究を行い、労力を最小にすることである。

イ　モデルBの技術文化に見出される価値指向性は、与えられた状況から多様な道具を製作し、良い結果を得るために総力を結集することである。

ウ　モデルCの技術文化に見出される価値指向性は、寄せ集めの材料から目的にかなったものをこしらえ、省力化をはかることである。

エ　モデルBとモデルCでは、影響力があると考えるものへの贈答は必要であり、両者間で依頼とねぎらいの挨拶が重要であるとされる。

オ　父親が「わたしのむすこよ」と呼びかけたり、息子が父親に「あなた」と言ったりするのは、契約観念が確立されているからである。